

ひゅーまん らいつ
HUMAN RIGHTS

平成26年12月24日 第6号

いじめをなくそう！～いじめ根絶集会から考える～

インフルエンザの影響で延期していた「いじめ根絶集会」を22日（月）に行うことができました。（集会の様子については、「生徒指導だより」にも詳しく紹介されていますので、そちらもあわせてお読みください。）

この通信では、いじめ根絶劇にあらわれた、いじめ根絶委員の人たちのいじめに対する「思い」やいじめそのものに焦点を当てて述べてみたいと思います。

いじめ根絶集会で上演した「いじめ根絶劇『ちゃんとやわなくちゃ』」のシナリオは、いじめ根絶委員の生徒たちが作ったものです。放課後、パソコン室に集まって、いじめについて考えていることなどをお互いに出し合っ、話し合い、自分の経験なども踏まえながら作り上げたものです。言葉の一つ一つに思いがこめられていました。

劇に次のような場面がありました。いじめに立ち向かっていくシーンです。



のなみ 「やめて！ねえ、言うほうはいいかもしれないよ。じゃあ言われる人はどうなのかって考えたことある？考えなくても解るでしょ。言われて嫌なことか否か。幼稚園児でもわかるよ。みな子ちゃんのことをちゃんと考えて！」

男子A 「な…なんだよッお前だって何もしなかったじゃんか。」

男子B 「そうだ！そうだ！」

のなみ 「確かにそうだよ。見て見ぬふりをしていた。だっていじめられるのが怖かったから。でも今は違う！」

一同 「「……………」？」

のなみ 「私…イジメられて、やっとわかったの。すごく悲しくて苦しくて辛くて死にたくなるくらい、追い詰められなかったら、きっとわからなかった……！」

男子C 「はあ？」

男子A 「何言ってるんだよ？そんなひどいことしてねえだろ？」

のなみ 「…そうだよね。してみる人にとってはそうかもしれないね。でもね、される人は違うの。”そんなことでもない”ことだってされる人にとっては、生きるか死ぬか……命にかかわるくらいのことだってなるの。」

いじめる側の「軽い気持ち」に対して、いじめられる側は「命にかかわる」ほどの問題であることが壮絶な「叫び」として語られています。

いじめは「軽い問題」ではないのです。そのことをいじめ根絶委員の人たちは訴えます。「軽い問題」でないことに気がついた主人公「のなみ」は、いじめの恐怖に打ち勝ち、勇気をふりしぼっていじめとたたかうことを決意したのです。こののなみの勇気がクラスを変えていきます。

「のなみ」がこのように勇気をもてたのは、お母さん、先生の働きかけがありました。特にお母さんの影響は大きかったと思います。お母さんは「のなみ」にこう語りかけます。



お母さん「みな子さんのお母さん、どんな気持ちだろうなあ…。もし、のなみがいじめられたりしたら、お母さん、本当に悲しくてつらくて、あなたを学校に行かせられないかもしれない。」

のなみ 「わ、わたしは大丈夫だよ。心配しないで。」

お母さん「あなたは私の宝物だからね。そんな宝物が、朝、家を出て行くときは『いってきます』って、元気で出かけていっても、帰りには心までズタズタにされて帰ってきたら、お母さんはつらくてつらくてたまらないからね。」

のなみ 「だから、大丈夫だって！」

お母さん「のなみ、親ってというのは、子どものことをずっと心配しているものなの！だから、みな子ちゃんもつらいと思うけど、みな子ちゃんのお母さん、お父さんだって、本当に今つらいと思うのよ。あなたは、そういう気持ちをわかる子だよね。」

のなみ 「わかってるって！」

皆野中学校に通っているみんなには、みんなのことを心から心配している親や、家族がいます。友達もいます。先生もいます。いじめはそういう人たちも傷つけてしまうのです。劇中でいじめられていた「みな子」の家族もきっと傷ついていたはずです。

いじめ根絶委員の人たちは、この劇や集会を作り上げるために、みんなで役割分担をしました。宣言文を発表した人、思いやり大賞に取り組んだ人、舞台上で演技をした人、裏方で照明や音響を担当した人、シナリオを作成した人、だれもがこの劇や集会を作り上げるのに必要な人たちでした。この人たちに大きな拍手を送りたいと思います。



劇中のいじめ根絶宣言だよ！

- 一、認め合おう 一人一人の 良い所
- 一、伝えよう 心を繋ぐ 愛言葉
- 一、嫌なこと 「嫌だ」と きちんと言わなくちゃ
- 一、やめようねイジメは犯罪 Don't bully !」

